

『山形県立米沢女子短期大学紀要』第五十号
二〇一四年十二月二十六日刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二）

菌部寿樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二）

蘭部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇三年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語については、やや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

『看聞日記』現代語訳（二）では、応永二三年（一四一六）正月一日から三月二九日までの分を、『米沢史学』三〇号（二〇一四年）に掲載した。

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二三年四月一日から七月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぎるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、

初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇三年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考

―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出

二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

松蘭斉「『看聞日記』に見える尼と尼寺」（愛知学院大学人間文化研究

所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）

清水久美子「装束の装飾加工技法に関する研究―平安時代における

加工技法の用例を中心に―」（『総合文化研究所紀要』一九九号、

二〇一二年）

松蘭斉「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院

大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）

（応永二十三年）四月一日、晴。「初夏の初日だ。たいへん幸せでめでたい」と予祝した。一日のお祝いをいつも通りした。昨日の和歌を披露した。私・田向経良三位・庭田重有・田向長資ら朝臣が和歌

について話し合って、評価した。各々自分の考えを述べ、ある者は満足し、ある者は謂われのないことだと不満をならし、状況はそれぞれまちまちだった。結局、右方が勝った。ただ衆議判だけでは不十分だったので、飛鳥井雅縁入道宋雅に判定してもらおうよう、御所様（貞成の父・栄仁親王）が命じられたそう。その後、十種香（※）をした。一献の酒宴などがあった。

※十種香（じしゅこう）：四種の香を三種は三包ずつ、一種は一包で合計一〇包をたいて聞き当てる香の遊び。

六日、晴。山ツツジが花盛りなので、御所様はお花見の遊覧にお出かけになった。新御所様（貞成の兄・治仁王）・私・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・寿蔵主らがお供した。松原の芝生で一献の酒宴をした。寿蔵主が酒宴の幹事をした。これは昨日の十種香で私が勝ったので、敗者の罰ゲームとして皆がやってくれたことである。

九日、雨が降った。琵琶法師の祖一勾当が来た。平家物語を語った。祖一は、今回、はじめて伏見宮家に来た。

興福寺常楽会

十五日、晴。新御所様のお部屋で音楽会があった。稽古として、重日（※）に雅楽の練習を始めた。田向長資朝臣も参加した。平調の曲を七つ弾いた。さて伝え聞くところによると、今日興福寺で常楽会があったそう。春に行くはずだったが、今まで延期されていたそう。興福寺寺務の仏地院が準備したという。荒序（こうじよ）を、六位以下・地下（じげ）の楽人である山井景房・同景親・豊原藤秋・同氏秋らがそれぞれ演奏したいと申し出た。ある者は有力者のコネ

を使い、ある者は自分が弾くのが道理だと申し出た。人選が難航したので、興福寺の衆徒たちは相談して、荒序の演奏を省略してしまつたという。なお、先例にも荒序を省略したことがあるそう。当日の法要の舞は以下の通りである。還城楽・延喜楽・入調・安摩・二舞、その後左・右交互に皇帝・新鳥蘇・蘇合・進宿徳・打毬楽・垣破・泔洲・林歌・陵王・落蹲。

※重日（じゅうにち）：陰が重なる巳の日と陰が重なる亥の日のこと。婚姻以外の吉事にいい日とされた。ただしこの四月十五日は丑の日で重日ではない。

十六日、法華会の法要の雅楽は、以下の通りである。央宮楽・綾切・入調・安摩・二舞、その後左・右交互に団乱旋・退宿徳・傾杯楽・敷手・北庭楽・八仙・散手・貴徳・還城楽・納曾利、退出音声は長慶子。後日、豊原郷秋が法華会雅楽のリストを持ってきた。それを見て記したのである。

今日、音楽会をした。盤渉調の曲を五つ弾いた。御所様が琵琶をお弾きになった。

十八日、晴。浄金剛院権野寺主が来た。伏見宮家にいる母親を氣遣つてお見舞いに来たのである。酒宴があった。

十九日、晴。音楽会があった。双調の曲七つを弾いた。妙音天に雅楽を奉納するためである。今日が重日だったので（※）、雅楽などを行つたのである。

※この四月十九日は、巳の日で重日であった。

石清水八幡宮臨時祭

二十日、晴。伝え聞くところによると、今日は石清水八幡宮の臨時祭

だ。先例により天皇の代始には臨時祭が行われる。午後一時に庭座（※）の儀があつた。舞人は退出した。称光天皇陛下は長橋に昇られて、お祭りをご覧物になつた。神官たちは各々乗馬しており、陛下の御前に向かつて一礼して退出した。内大臣の室町殿がお仕えなさっているので、ことさらにお祭りは仰々しく行われたようだ。

勅使は千種雅光参議兼近衛中将、舞人は山科教高中将・中山定親中将・六条有定少将・世尊寺行豊侍従・坊城元長大内記・勸修寺経直・坊城俊国・粟田口治長・源持仲極臈・源重仲蔵人将監である。

加陪従（※）は、今出川家から参加させた興衡朝臣・西園寺家からの友清・三条大納言家からの重統・徳大寺家の懐俊・花山院家の敦憲・徳大寺家の雅盛である。

庭座の公卿は、室町殿内大臣・西園寺実永右大将・広橋兼宣大納言・押小路足利義嗣大納言・冷泉為尹大納言・三条公量新大納言・三条公雅中納言兼大宰権帥・烏丸豊光左衛門督・日野有光中納言・山科教興参議・裏辻実秀参議兼近衛中将である。

所役の殿上人は、山科教豊内蔵頭・鷲尾隆豊中将・白川資雅近衛中将兼神祇伯・四条隆盛中将・坊城長広刑部大輔・四条隆夏少将らである。

今日、入江殿今御所と岡殿がいらつしやつた。善覚房がお供してきた。岡殿はお酒一献をお持ちになつてきた。御所様の病氣ご快気のお祝いをなさりにきたそうだ。酒宴があつた。私は岡殿とは初対面である。田向長資朝臣一人だけがお仕えした。人がいないのだ。田向経良三位は、石清水八幡宮臨時祭の見物がてら京に出ている。

※庭座（にわざ）：庭上に設えた座席。庭の座。賀茂臨時祭や石清水

臨時祭に設けた。

※加陪従（かべいじゅう）：臨時に加えた楽人。

小忌装束

二十二日、晴。世尊寺行豊が来た。石清水八幡宮臨時祭の小忌（※）装束をご覧に入れるため、装束を着たまま参上してきた。神妙なことである。珍しい姿で目の保養になつた。特に酒を与えた。その後すぐに退出した。小忌の様子は、袍（麻布で地の色は白。桐、竹や鳳凰の絵が描いてある）・摺袴（※麻布。孔雀の絵が描いてある。屏風絵のようだ。裏地の色も見えないくらい、びっしりと描かれており、錦のようにみえた）。袴には括り紐があつた。摺袴の下に板引（※）の紅袴を重ね着していた。上袴・下袴いずれも表地だけだつた。袴の股立（※）から円い緒の組み紐が総角（※）によつて出ていた。組み紐の前に露のようなものがみえたが、それは水晶だつた。左の袖の上に赤い紐があつた。下襲（※）・半臂（※）は通常通り、表地だけだつた。裾（※）は通常のように蘇芳色（※）だつた。小忌衣の後ろの裾（すそ）は長くて裾（きよ）の上に重なっているが、裾（きよ）よりは小忌衣の後ろの裾（すそ）の方が幅が狭い。それは麻布の一ハタハリ（※）の幅である。剣は平緒（※）の帯で吊されておき、螺鈿の裝飾があつた。尻鞆（※）は虎皮である。平緒は紺地であつた。冠には纓（※）が懸かっている。挿頭（かざし）は桜の花である。沓は絲鞋（※）。扇は通常のものと同じである。小忌の装束は、だいたい以上のような様子であつた。

この前の大嘗会の時、田向長資朝臣が小忌衣で参列した。その表袴も通常の様だつた。長資の小忌装束には、日影糸心（※）があつ

た。しかし今回の行豊の小忌装束には日影糸心がなかった。

将来、よくわからなくなることもあるだろうからと思ひ、詳しく記録した次第である。

※小忌（おみ）…小忌衣（おみごろも）のこと。袍（ほう）の上に着る小忌の官人の斎服。白布に春の草木・小鳥などを藍摺にし、右の肩に二条の赤紐をつける。

※摺袴（すりばかま）…種々の文様を摺り付けて染め出した袴。

※板引（いたびき）…漆塗の板に蠟とクルミの油を塗ってから、糊をひいて生地をはり、乾燥してはがした絹。

※股立（ももだち）…袴の左右、腰の側面にあたる明きの縫い止め部分。

※総角（あげまき）…古代の少年の髪のかき方。頭髪を左右に分けて頭上に巻きあげ、角状に両輪をつくったもの。

※下襲（したがさね）…袍と半臂の間に着る服。

※半臂（はんび）…袍の下に着る袖なしの胴着。

※裾（きよ）…下襲の後ろに引く長い尾のような部分。

※蘇芳色（すおういろ）…黒味を帯びた赤い色。

※一ハタハリ…未詳。布の一幅（ひとの）＝一尺のことか。

※平緒（ひらお）…左腰に剣をつるす幅広の帯。

※尻鞆（しりざや）…太刀の鞘を覆う毛皮の袋。

※纓（えい）…冠の後ろから背中にたらず長細い薄布のこと。

※絲鞋（しがい）…いとのかつ…絹糸製の沓。

※日影糸心…日陰の糸（ひかげのいと）のことであろう。神事の際に

冠の笄（こうがい）の左右に結んで垂らした青色または白色の組糸。

光台寺の風呂

二十三日、晴。賀茂祭である。典侍は広橋大納言の娘、近衛使は白川雅量近衛少将兼神祇伯である。住心院深基法印が来た。一献分のお酒を持参した。深基法印は、豪融僧正の弟子である。そして実は豪融の息子でもある。豪融がまだ稚児で出家する前にできた子だそう。一献の酒宴があった。新御所様と私は参加しなかった。田向経良三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・世尊寺行豊が参加した。琵琶法師の祖一が来て、酒宴の際に平家物語を語ったそう。深基は数時間して、帰ったという。その後、光台寺の風呂に入った。

この光台寺の風呂は、去年、三木与一善康が叛逆した時に、善康によって焼かれてしまった。その後新造したので、光台寺から風呂の入り初めに御所様をお招きしたのである。新御所様・私・椎野寺主・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊・寿藏主らがお供した。光台寺住職の部屋で一献の酒宴があった。住職と老僧二人が御所様をおもてなした。ここでも祖一が平家物語を語った。

酒宴の時、土倉の宝泉を御所様の御前に呼んでお酒を与えた。宝泉が出資者となって光台寺の風呂再建に貢献したので、それを褒めるためにお呼びになったのである。名譽なことだと言えよう。

二十四日、晴。祖一が平家物語を語った。祖一は、「これから播磨国の方へ行きます」と申した。それで琵琶の弦の一揃いを御所様が与えた。

北野天満宮の怪鳥

二十五日、晴。北野天満宮に今夜、怪しい鳥がいたという。鳴き声は、

大竹を押しつぶしたような音だったそうだ。神社も大きな音を立てて揺れた。二またの杉に止まって鳴くので、参詣する人や通夜をする人たちがとても驚いたらしい。自分の低い社僧一人が弓でこの鳥を射落とした。鳥の頭は猫、身体は鶏で、尾は蛇のようだったそうだ。目は大きく光っていたという。世にも希な怪鳥である。室町殿へ報告したら、怪鳥を射落とした社僧にお褒めの言葉があった。練貫（※）一重と太刀一振を社僧に下さった。鳥の死骸は川に流すうにお命じになったという。

※練貫（ねりぬき）：縦糸に生糸、横糸に練り糸を用いた平織りの絹織物

妙薬「亀の小便」

二十六日、晴。御所様が最近、お耳が熱っぽくなって聞こえなくなつた。医師の昌著に御所様が対処法をお尋ねになった。「亀を水で洗つて、仰向けにして鏡で自分の姿を亀にみせると、小便をするはずです。その小便を良い漢方薬に調合してお耳に入れるとよろしいです」と昌著は答えた。そしてその良薬を献上した。それで宇治川に行つて亀を捕まえて、言われたとおりに鏡を見せた。亀はすぐに小便をした。医師の言つたとおりだ。すばらしい処方だ。

二十九日、晴。釈迦の入滅を追悼する涅槃会だ。その法会に飾るための、家の垣根や橋まで付いた花台を宝泉が献上した。それをお手許でご覧になった。すばらしい品だった。

五月二日、晴。豊原郷秋が来た。音楽会をした。双調の曲、鳥破・鳥破急・颯踏入破・賀殿急。朗詠は私が歌つた。それに胡飲酒破・陵王破を演奏した。御所様は御琵琶、新御所様と私も琵琶、田向長資

朝臣と郷秋は笙、田向三位は大鼓を演奏した。聞くところによると、今日から等持寺で法華八講を始めたとか。故鹿苑院・足利義満殿の追善供養だ。毎年のことである。

宇治橋供養

三日、晴。伝え聞くところによると、宇治橋の供養があつたそうだ。導師は西大寺長老の英源で、参加した僧侶は三千四十人余り。奈良や京都や畿内近国の律僧たちが集まつたそうだ。天王寺の楽人による舞童の舞が三番あつた。すばらしい法会だったそうだ。見物人が京都や地方から大勢集まつたという。伏見宮家からも侍女三人が見物に行つた。この宇治橋は応永二十年（一四一三）に付け替えられた。それで今日、橋供養の法会があつたのだ。

和歌論争

今日、連歌会があつた。そのことで、いさかひがあつた。「まの入江」という句に「方田浦」と付けた句があつた。これについては典拠となる「帰りこん ことは方田に 引く網の 目にもたまらぬ 我が涙かな」という和歌がある。「この歌は、藤原成親新大納言の和歌だ」と新御所様が仰つた。それに対して、私は「いえいえ、平時忠大納言の歌です」と反論した。新御所様は、「絶対、成親卿の歌だ」と自説をかたくお譲りにならない。それに加えて更にまた田向経良三位が「それは、平重衡朝臣が関東に下つた時に詠んだ歌だと思ひますけど」と申した。三人で言い争ひになった。結局、お酒を懸けて争うこととなった。すなわち、間違つていた者が罰としてお酒を負担するというわけである。

平家一門の和歌集

庭田重有朝臣が平家の人々の和歌を集めた冊子を持ってきた。それを御所様をご覧になった。平時忠大納言が能登国に配流された時に方田浦で詠んだ和歌だと判明した。それですぐに私の勝ちとなった。新御所様と田向経良三位はだんまりを決め込んでいる。皆が感心して大笑いして終わった。すぐに大きな甕に入ったお酒をお二人が用意して、一献の酒宴となった。私としては、近ごろにない名譽だ。酒宴には椎野寺主や冷泉正永らも参加した。それ以外は、いつものメンバーだった。

四日、雨が降った。御所様が薬玉を室町殿と若君の足利義量殿に進上なさった。清原常宗が取り次いで室町殿のお目につけた。若君には室町殿御所の女官が取り次いで差し上げた。「おめでたいことです」とのお返事があった。等持寺の法華八講に今出川実富大納言が参列したそうだ。

五日、晴。いつものように端午の節供のお祝いをした。風呂に入った。その後、連歌をした。

さて伝え聞くことには、賀茂競馬の見物人たちが帰り道、富小路あたりで喧嘩になったそうだ。裏松家の家人と畠山家の家人が互いに刀で殺し合いになったらしい。室町殿は裏松家も畠山家もお咎めになって、両家共に室町御所へ出入り禁止となった。

九条家家司・八条公衡の奮戦

また今夜、一条経嗣関白の家や九条満教右大臣の家に強盗が入った。九条家家司の八条公衡中将がただ一人、数ヶ所傷を負いながらも防戦したという。そのうえ、強盗のうちの一人を討ち取った。また傷を負った強盗も何人かいるらしい。公衡朝臣は公家なのに強盗

を討ち取り、とても名譽なことだと評判になっている。

六日、晴。御所様が指月庵にお出かけになった。今年はじめてのことである。すぐに御所へお戻りになった。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。黄鐘調の曲、桃李花二帖・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・海青楽、朗詠、汎龍舟・鳥急を演奏した。御所様は鞆鼓、新御所様と私は琵琶、田向経良三位は大鼓、田向長資朝臣と豊原郷秋は笙であった。

今日は法華八講の最終日だった。今出川公富参議兼近衛中将が参列したそうだ。

慈光寺師仲の死

八日、晴。大光明寺の得都寺(※)が来た。法事中の軽食の経費を持ってきた。「明日の法事で、大光明寺長老様が焼香してくださいるので、御所様にも法事にご参列いただければ、ありがたいのですが」という申し入れであった。得都寺の父上三十三回忌の追善供養を執り行うため、このように申し入れたそうだ。御所様は「参列するつもりだ」と仰つて、得都寺にお酒を飲ませた。そして茗(※)を十袋与えた。

ところで、慈光寺師仲右衛門佐が今朝亡くなったそうだ。去年よりでき物を患っていて、医師たちも見放していたという。そして、とうとう命を落とした。とてもかわいそうだ。父親の三位入道通光の悲しみは言うに及ばない。かわいそうだ、かわいそうだ。師仲の息子である持仲(持経)は六位蔵人極臈として、今、室町殿がたいへんかわいがっている。上皇様も同様のようだ。そういう関係もあるのだ、田向経良三位をお見舞いの使者として行かせた。

※都寺(つうす)：禅宗寺院の職階の一つ。

※茗（めい）：新芽を遅く摘んだお茶。

九日、雨が降った。焼香と法会参列のため、朝早く御所様は大光明寺へお出かけになった。新御所様と権野寺主も同じくお出かけになった。私は行かなかった。侍臣たちは皆出かけた。大光明寺長老の徳祥和尚が焼香した。

田向経良三位が竹田御塔（※）の修理のことで、京都に出かけた。

その費用となる法安寺田へ賦課する段銭のことで、冷泉永藤参議入道へ御所様の命令を伝えるためである。

※竹田御塔：未詳。

十七日、晴。用健蔵主が来た。一献のお酒を用意なさって、御前で酒宴となった。さらに陽明局（※）でも用健は酒宴を主催した。陽明局へ御所様もいらつしやうした。皆が揃った。酒盛りとなつて、皆が酔っ払った。

※陽明局：用健の母（三条実音の娘）。

古文書・古記録の虫干し

十九日、晴。他所に預けて置いた文書類をお取り寄せになつてご覧になり、虫干しをした。先祖代々の御日記がいたるところで虫に食われており、残念なことだ。音楽会があつた。盤渉調の曲を七つ演奏した。参加者はいつものメンバーだ。

二十日、晴。重日恒例の雅楽の練習会があつた。平調の曲を七つ演奏した。御所様は鞆鼓を打った。それ以外はいつもの通りだった。

諸社・諸寺の怪異

二十一日、晴。庭田重有朝臣が京都から帰ってきた。京都で聞いた世間話を話してくれた。春日社や日吉社で、怪異があつたそうだ。春

日社の社頭あたりに突然、一夜のうちに穴が空いたという。穴の底へ棹を差し込むと、深さは六メートルほどに及んだという。あまりに不思議な事なので、春日社の社家が朝廷へ報告したそうだ。

また日吉社の小五月会で神輿が出発する時に、鳩が一羽飛んできて神輿の長柄に衝突し胸を強打して即死したそうだ。だいたい日吉社のあたりでは鳩がほとんどいないという。また鹿も一頭死んだそうだ。これらのことも日吉社の社家から報告されたという。

石清水八幡宮でも怪異があつた。しかし同社の社務は当時、何も報告しなかつたそうだ。

また北野天神である菅原道真が、大衆になりかわつてご病氣になつていらっしゃるらしい。それで大勢が北野天満宮にお参りし、皆、和歌や連歌などを奉納しているそうだ。

また春頃から三井寺へ琵琶湖から燈明が流れ寄ってくる。まるで櫛戸（※）のようだ。これは、日本国にとつても三井寺にとつても怪異である。先例では、このような事があると、三井寺に火災があるという。

諸社・諸寺の怪異は不思議なことだといえよう。

※櫛戸（くしど）：頻繁なことのたとえのようだが、未詳。

二十二日、晴。先日、九条家に強盗が入つたことで、お見舞いの使者を派遣した。九条満教右大臣は恐縮していた。楊梅親家卿が取り次ぎ役だつたそうだ。田向経良三位がその使者であつた。

白い羊

さて称光天皇陛下が世尊寺行豊に白羊一匹をお預けになつた。その羊を行豊は田向三位に預けた。田向三位は羊を引いて帰り、伏見

宮家で皆に見せた。初めて羊を見た。面白かった。

地藏講

二十四日、晴。地藏講があった。御所様の逆修(※)のための発願である。寿蔵主が実施責任者となった。即成院の善基房が導師を勤めた。

まず御所様の御前で、皆が軽食をとった後、善基房による地藏菩薩本願經の講演が始まった。

先に平調の調子が吹かれた。そして万歳楽。善基房が高座に上って、一同拝礼した。次に講式が読まれた。次に三白急が演奏された。伽陀(※)を読む式があった。次に泔洲が演奏された。その次に伽陀の式。次に春楊柳の演奏。また次に伽陀の式。次に五常樂急。次に伽陀の式。次に降樂として太平樂急。そして回向(※)の伽陀と林歌の演奏で、法会は終了した。

御所様は鞆鼓、新御所様と私は琵琶、田向経良三位は大鼓、田向長資朝臣は笙を演奏した。僧の人数が少ない、ささやかな法会だったが、特に經典の講演を模範となさったものであった。これからは伏見宮家の男女が順番を組んで、継続的に地藏講を行おうということになった。

※逆修(ぎやくしゅう)：生きているうちに、あらかじめ死後の冥福を祈って仏事を行なうこと。

※伽陀(かだ)：經文の一段、または全体の終わりにある韻文体の詩句。

※回向(えこう)：法会の功德を誰かに差し向けること。ここでは、御所様へ功德を差し向けるということになる。

二十五日、晴、夕方に雨が降った。連歌会があった。北野天神がご病

気なので、それをお慰めしようと世の人々が連歌を奉納しているという。それで、御所様も奉納なさることとなったのである。宮家の面々も祈禱のために連歌を詠んだ。参加者は、御所様・新御所様・私・椎野寺主・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・善基房・沙弥行光らである。午後七時前頃に百韻詠み終わった。善基房を初めて連歌会のメンバーに加えた。彼の連歌の才能に、問題はなさそうだ。

二十七日、雨が降った。重日なので音楽の練習会をした。一越調の曲を七つ弾いた。その後、御所様のご命令で、請取楽(※)ということをした。新御所様・私・田向長資朝臣の各々が代わる代わる御所様の雅楽指導を受けた。楽曲は青海波だった。私は練習不足だったので、指導を受けた際に、拍子が遅れてしまい、つまらない演奏になってしまった。もっと練習に励まなければいけない。

その後、古文書の虫払いをした。「行成卿」とリストに書かれた箱に藤原行成卿直筆の書があった。三種の神器の神鏡が燃えてしまったので、直すすべきかどうか、いろいろな学者に答申させた答申書や公卿たちが議論した内容などを藤原行成が直筆で書写した一巻である。この一巻には、伏見上皇の奥書もある。大変な重宝だ。しかし虫食いがひどい。取り出して、他の箱に入れ替えた。

※請取楽(うけとりがく)：未詳。師匠と弟子が一对一で個別に雅楽の指導をうけることか。

三十日、晴。豪融僧正が来た。数時間、御所様と雑談をした。椎野寺主が寺に帰った。

相国寺僧の武装肅正

六月一日、晴。愛染明王へいつものお祈りをした。東寺の教遍法印が私の護り仏を供養してくれた。

さて伝え聞くところによると、よろしくないことに、相国寺の僧たちが武器を持っているという。それをお調べになるために、わざわざ室町殿ご自身が相国寺へお入りになったそうだ。そして、にわか大般若経略読の法要をなさるといふことで、「相国寺の僧侶は全員、仏殿へ集まりなさい」といふお触れをお出しになった。それで、僧は皆、仏殿に集まってきた。

その留守中に、侍所の者と思われる武士に、寮や塔頭など寺中をくまなく搜索させたそうだ。その結果、武器が八十あまりも見つかったという。それらの武器を持っていた僧三十二人を逮捕し、侍所へ身柄を拘束なさった。ただ、この僧のうち二人は斯波義教右衛門督が身柄を預かり、あと二人は侍所から逃げ出したそうだ。残る二十八人の僧は鳥流しにされるようだ。この騒動の発端は、ある稚児が金属製の鞭で僧侶の頭を打ち割ったことにあるそうだ。この事件があつてから、僧は武器をもつべきではないと、室町殿が厳しくお取り締まりになったということだ。

二日、晴。音楽会があつた。豊原郷秋が来た。盤渉調の曲を七つ弾いた。今度の九日に行蔵庵で法事がある。行蔵庵主故明見の遠忌二十五回忌だそうだ。三十三回忌を繰り上げて行うという。法事には御所様や宮家の方々もご参列下さいと、寿蔵主が申された。法事では雅楽の演奏があるので、そのために練習をした。

僧伝明の法華経講義

三日、晴。御所の近く、新堂というお堂で、伝明という僧が法華経を

講義するという。それで、伏見宮家の男どもが聞きに行つた。とても良いと言うので、宝厳院の塔頭へお呼びになつて、表向きは比丘尼たちが聞くということにして、御所様たちが秘かにお聞きになつた。般若心経について講義をし、次に法華経の随喜功德品・法師功德品について解説した。論説に問題はなさそうだが、あまり詳しい知識はないようだった。

その後、雅楽の練習をした。昨日練習した蘇合序の琵琶であるが、新御所様も私も弾き方を忘れてしまつて、散々な演奏になつてしまつた。それで豊原郷秋について練習を続けた。

四日、晴。世尊寺行豊・五辻重仲藏人・清原範量藏人が宇治の今伊勢神社へ参詣しての帰り道、伏見荘の指月庵へ参拝に来た。清原常宗の孫である範量は、これまで指月庵を拝観したことがなかつたので、是非、参拝したかつたそうだ。田向経良三位が三人を船に乗せて宇治川を遊覧させたという。

六日、晴。勝阿が一献の酒を持参してきた。さて九日の法会でおこなう雅楽の演奏であるが、地下の楽人は都合がつかないそうだ。それで法会を八日に繰り上げたらいかがですかと、綾小路信俊前参議が書状で提案してきた。それで八日に繰り上げなされた。また雅楽の練習をした。

七日、晴。いつものように祇園祭があつた。伏見宮家でも内祭をした後、酒宴があつた。明日に向けて、皆、いろいろと準備することがあつた。綾小路信俊前参議が来た。彼は明日の行蔵庵法会の幹事なのだ。雅楽の練習をした。盤渉調の曲七つと朗詠などを練習した。蘇合急の残楽は新御所様、青海波の残楽は私が、それぞれ練習した。

行蔵庵地蔵講

八日、小雨が時々降ったが、午後四時頃には晴れた。朝早く御所様・新御所様と私が法会に参列するため、行蔵庵に出かけた。舜蔵主・对御方（栄仁親王の妻・新御所と貞成の実母・三条実継の娘）・近衛局（栄仁親王の妾・日野西貞国の娘）・今参（庭田幸子・貞成の妻）は招かれて行った。また惣得庵主や尼たち四〜五人、大教院隆経律師や伏見宮家の局女・女官らに至るまで、皆参列した。招かれた僧として、式師の永延寺見邦、伽陀衆の蓮穆・見通・見俊・見英が来ていた。御簾の内の楽人は、御所様・新御所様・私。その他の楽人として、綾小路信俊前参議・綾小路三位（田向経良）・田向長資朝臣、地下の山井景清・豊原郷秋・同敦秋が来ている。それでも、人数が足りない。しかし、行蔵庵主の計らいでもう少し人を呼び寄せた。まず軽い食事を僧たちが用意した。御所様以下、内々に軽食を済ませた。三献の酒宴があった。その後、僧たちが軽食をとった。そして、法会が始まった。

行蔵庵の道場の様子、仏殿の広さは東西の柱間が六間、南北も六間ある。仏殿南側三間分の明かり障子を取り払ってある。仏殿の奥北側三間のスペースに本尊を安置してある。東側に釈迦と虚空蔵の絵、中央に木像の釈迦と地藏を安置している。地藏は加羅陀山千鉢木像の一つである。この本尊の前に、供物と燈明が置いてある。また机が一脚あり、その上に香炉が置いてある。導師が座る壇である礼盤（らいばん）と磬台（※）は通常通りである。また西側には地藏の絵が安置されている。これは光明上皇の姿を地藏菩薩として描いたものである。裾（きよ）が長く描かれている。その左脇に故明

見の位牌を立て、位牌の前にお供物がある。

西側の南端の方二間に緑色の御簾を懸け垂らし、御所様の御座所としている。御簾の前には南北方向に折畳を二帖敷いてある。その次、南面した所に東西方向に折畳を二帖敷いてある。これらは殿上人の楽人の座である。その向こう、東面に畳を二帖、南北方向に敷いて、僧侶の式師・伽陀師（※）の座とする。西の畳に式師が着座し、東の畳に伽陀師が着座する。東に面した二間、その北側奥の一間にも緑色の御簾を懸け、参列所とした。その外側の廂一間分に落板を南側に敷いて、地下の楽人の座とした。その向かい合いである廂の北側に屏風を立て隔て、参列所とした。道場の東の対屋を僧侶や地下楽人の休み所とした。

開始時間になって、殿上人や地下の楽人たちが着座した。御簾の中の御所様も着座した。この垂らした御簾の中に、新御所様と私も同座した。御所様の座の後ろに屏風を立て回し、侍女や惣得庵主らが座った。

まず盤渉調の調子を吹いた。僧たちが道場に入り、着座した。次に宗明楽が演奏された。式師の見邦が高座に登った。次いで皆で礼をして、伽陀が唱えられた。次に地藏講式が読まれた。次に蘇合序が十二拍子で演奏された。次に伽陀師の見英が声を整えて伽陀を唱えた。次に地藏講式。次に蘇合序三帖。次に伽陀、これには伴奏として綾小路信俊前参議が笛、郷秋が笙を吹いた。次に地藏講式。次に蘇合破急、これを三回繰り返し、順番に演奏を止めていった。最初は笛の綾小路前参議が止め、次に笙の田向長資朝臣、そして琵琶の新御所様が最後に残った。次に伽陀、伴奏の笛は山井景清、笙を

敦秋、琵琶が御所様。次に地藏講式。次に万秋楽破、次に伽陀、伴奏の笛は景清、笙は郷秋、琵琶は新御所様。次に地藏講式。次に輪台・青海波、三回の残楽、笛は景清、笙が敦秋、琵琶が私。次に回向の伽陀、伴奏の笛は景清、笙が敦秋、琵琶が御所様。次に千秋楽、三回の残楽、最初は笛で綾小路前参議、次は笙で郷秋、最後に残ったのは琵琶で御所様。この残楽の最初の時、式師が高座から降りた。残楽が三回終わってから、僧たちが退出した。次に楽人が退出した。その後、御所様が控えの間にお入りになって、皆で食事をとった。

田向経良卿は春の舞天覧の時、演奏したいと希望したが、称光天皇陛下のお許しはなかった。それで笙を吹くのを止めてしまったそうだ。残念なことである。それで今日、経良は大鼓を打ったのである。御所様はご病気になるまで以来、お身体が思うようにならないので、琵琶は時々しかお弾きにならなかった。その代わり、鞆鼓をお打ちになったのである。

琵琶法師の椿一検校が来た。このところ名望のある堪能な琵琶法師だ。そこでこの道場の場で、平家物語を三句語らせた。参列者や僧たちも大勢、この平家語りに耳を傾けた。さらにまた一献の酒宴を続けた。夕方になって御所へ帰った。

さて経良卿は法会が終わるとすぐに京都に出て行った。田向長資朝臣が朝廷の小番に指名された。これは毎月三度、九日・十九日・二十九日の宿直役である。その命令書が今朝届いたので。小番の幹事は広橋兼宣大納言である。長資は差し障りがあつて小番を勤仕できないことを伝えるため、急に京都に出ることになったのである。それで経良は酒宴に不参加だった。残念である。

僧たちは、今夜は行蔵庵に泊まるという。景清と敦秋は京都に戻った。郷秋は留まった。法会はずばらしかった。式や伽陀の声明もすばらしかった。参列者は大勢だった。明日、懺法をしたいと、御所様をご希望を内々にお話しになった。

※磬台（けいだい）：磬（石板の打楽器）を据える台。底本が「声台」と読んでいるのは誤り。

※伽陀師（かだし）：伽陀を唱える僧。

栄仁親王の中風再発

九日、晴。懺法の聴聞が御所様のお望みであったが、「やはり行蔵庵の間になるだろうから思いとどまる」と仰った。しかし僧たちにも雅楽の演奏を聴きたいという気持ちがあるらしい。それで、御所様にいらつしゃってくださいと行蔵庵から重ねて申し出があった。それでは出かけようかと準備していたところ、ご持病の中風が再発した。そのため、お出ましにはなれなかった。とても残念なことだ。僧たちからも残念ですと返事があつたらしい。

庭田重有・田向長資朝臣が行蔵庵から帰ってきた。軽い食事の後、僧たちと平家語りを聞いていたそうだ。その後、僧たちも、風呂呂に入ってから、それぞれの寺に帰っていったという。

御所様の中風の症状が治まらないが、雅楽をお聴きになりたいと仰った。それで音楽会を開いた。太食調の打球楽・朝小子・太平楽・合歡塩・傾杯楽急・輪鼓・禪脱・抜頭を演奏した。その後、舞を立て、左舞の喜春楽・賀殿・陵王破、右舞の退宿徳・長保楽・納賀利を合奏した。笛は綾小路信俊前参議、笙は田向長資朝臣と豊原郷秋、琵琶は新御所様と私で、大鼓を右舞の時、郷秋が打った。鉦鼓は田

向長資朝臣。

音楽会が終わった時に、田向経良三位が帰ってきた。長資朝臣の朝廷小番について差し障りがあると申し上げたが、再度厳しく命じられたので、了承してきたという。

夜になって、琵琶法師の椿一検校が来た。平家物語を五句語った。聴衆が多く集まってきた。

十日、晴、夜になって大雨が車軸のように降り、雷も鳴った。音楽会があった。盤渉調の曲、通常の拍子の採桑老、万秋楽の序と破・輪台・青海波、そして朗詠をした。私のリードで竹林楽も演奏した。次に舞を立て、三台・皇仁・河南浦・八仙を演奏した。笛は綾小路信俊前参議、笙は田向長資朝臣と豊原郷秋、琵琶は新御所様と私、大鼓は田向経良三位、鞆鼓は御所様、鉦鼓は田向長資朝臣だった。

夕方、葉室教仲が一献の酒を持って来た。故葉室朝仲入道は伏見宮家に一生懸命お仕えしたが、領地の配分が変わってからは疎遠となった。その上、教仲が朝廷にお仕えするようになってからは、全く伏見宮家に来ていない。教仲は今朝、石清水八幡宮にお参りし、そのついでに田向家に来たという。更にそのついでに伏見宮家に寄った次第らしい。一献の酒宴の時、椿一検校が平家物語を語った。酒宴は深夜に及んだ。私は教仲とは会わなかった。

豊原郷秋の御恩地

十一日、晴。行蔵庵で明日、故明見庵主の仏事がある。御所様の法華經寿量品に錢一貫文の御布施を加えて、行蔵庵へお送りになった。かつての明見庵主の伏見宮家に対する奉公忠節をお忘れになっておらず、それに酬いるため、送られたのである。寿蔵主がとても恐れ

多いことだと、お礼を申し上げていた。

さて豊原郷秋がお願い事があって、このところ伏見宮家へ来ていいる。その願いを綾小路信俊前参議と田向経良三位が御所様に取り次いでいる。伏見荘加納の芹河村を故豊原国秋が御恩地として拝領していた。ところが長講堂の御領地継承者が変わった時に、領地替えになってしまった。その後、伏見荘が御所様の領地として承認された際、高辻長広朝臣が芹河村を御恩地として申請し、御所様からいただいた。郷秋はこの領地に対する由緒を何度も申し上げたけれども、長広はきちんと奉公しているので、理由もなく領地を取り上げることは難しい。だから、無理な相談だと、郷秋の訴えを退けていらつしやう。それでも何度も信俊・経良両公卿を通して訴えていた、

笙の秘曲伝授と相伝系図

また御所様の笙に関して、故国秋が師匠として笙の相伝系図に御所様の名を書き入れていた。またこの系図を後小松上皇様にもご覧に入れていた。ところが実は御所様は一つの曲をまだ伝授されておらず、それにもかかわらず系図に名前が入れられていることは、雅楽の道として問題がある。そこで郷秋がその蘇合四帖を伝授してさしあげたいと申し入れた。そしてそのご褒美としてこの一村を頂戴したいと願ひしてきた。秘曲を伝授することは、御所様は既に出家なさっているし、高齢なので、いまさら無駄なことである。それに領地を取りあげられる長広朝臣は、きつと歎くことだろう。というところで、いづれにしてもその望みは叶えがたいと御所様は仰った。それにもかかわらず、信俊・経良を通して理不尽にしつこく申し入

れたので、しかたなく、今日、郷秋に領地支配の承認書をお下しになった。承認書の体裁は女房奉書で、経良が奉行として書いて、郷秋に与えた。その承認書の中に「一曲を伝授したご褒美」だと書き載せなされた。郷秋は恐れ多いことですと申し上げた。

さてその長広朝臣だが、この春から伏見宮家へ出仕していない。あまりにもひどいので、しかたなく領地を取り返しなされた。きつと奉公をとりやめるのであろうから、いよいよ伏見宮家では人手が足りなくなつて、不便なことよ。私としても嘆かわしく思うところである。

御所様が中風でご気分がすぐれないので、御簾の中で雅楽をお聴きになりたいと仰つた。それで音楽会をした。一越調の曲七つ、次に舞を立てて左楽の万歳楽・春庭楽、右楽の鳥蘇・新鞆鞆を演奏した。演者は綾小路前参議・田向三位・田向長資朝臣・郷秋らである。音楽会が終わつてから、綾小路前参議が酒宴を用意した。御前の酒宴が終わつてからも、さらに台所で酒盛りがあり、乱舞をした。郷秋が音調を変えて雅楽の曲をいろいろと演奏したので、聞いていて楽しかった。

十二日、晴。行蔵庵の仏事に大光明寺長老以下寺庵の僧たち八十人余りが招待されたそう。綾小路前参議が京都へ戻つた。今出川家より私のことに関して、綾小路前参議を通して申し入れたことがあつた。領地のことのように。御所様からご返事をなさつたそう。

鬼一口の絵巻物

十三日、晴。御所様は腰痛で気分が悪く、またお熱もある。もしかしたらこの頃流行している風疹かもしれない。医師の同阿が来た。「お

風邪で身体が冷えているご様子です。良い薬を調合しましょう」と言つて、出ていった。権野寺主から絵巻物二巻を借りた。鬼一口（※）の物語である。とても古いもので、すばらしい絵である。後で聞いたところによると、大覚寺義昭殿の絵だそう。寺院の宝蔵にあつた絵の類だろう。

長広朝臣が一村をお取り上げになつたことを歎いて訴えてきた。当然のことだ。替え地を与えてやると御所様は宥めなされた。

※鬼一口（おにひとくち）：『伊勢物語』第六段「芥川の段」のように、鬼が一口で人を食べてしまう説話のこと。

十四日、曇。いつものように、祇園会があつた。御所での内祭はしなかつた。御所様の病状は相変わらずである。同阿が薬を持ってきた。その薬は加減人參湯である。

宇治川の殺生禁断

十六日、雨が降つた。日野資教一位入道が納涼のため伏見にいらつしゃつた。前々から田向経良三位が伏見での納涼を約束していたらしい。惣得庵を宿に借りた。軽い食事を用意させたという。その後、宇治川の川上で船に乗つたそう。乗船したのは、一位入道・日野有光大納言入道・山科教遠卿・四辻季保朝臣・柳原行光・日野盛光・日野量光・冷泉永宣、それと名前は知らないが酒正頭の役人たちである。田向三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊もお供していたそう。

さて彼ら是指月庵の眼前を流れる宇治川で魚釣りをした。ちょうどそこへ、大光明寺の僧たちが行き合つた。僧たちが「ここはお寺の殺生禁断の区域内なので、釣りをしてはいけません」と制止した

が、日野一位入道らはそれを全く無視して、一向に聞き入れなかった。それで僧たちは怒って、御所に押しかけ、「この不法を領主として制止してください」と訴えた。後から大光明寺の長老徳祥和尚もやって来た。長老は怒り狂っており、「生き物を殺してはならない」というこの土地の掟を破るといふ所行にでたのは、他でもない、伏見宮家の奉行である田向三位と政所の小川禅啓ですぞ。御所様が処罰なさらないのなら、すぐに室町幕府へ訴えます」と、神仏に誓いを立てつつ、申された。それで御所様が殺生を禁止する命令書を船にいる人々に出したので、客人たちは釣りを止めた。そして彼らは興ざめして、そのまま京都へ帰っていったそうだ。それでも長老の怒りは収まらなかったで、奉行の田向三位と政所の小川禅啓はしばらくの間、伏見宮家へ出仕停止にすると御所様はお命じになった。思いがけない珍事である。

夜に琵琶法師の椿一が来た。平家物語を語った。お茶十袋と扇などを褒美として与えた。明日は、伏見から旅立つという。

十七日、晴。朝早く大光明寺長老の徳祥和尚が衣鉢侍者を使者によこして、昨日の件で、なお一層厳しく処罰していただきたいとの申し入れがあったそうだ。それで、田向経良三位の伏見荘奉行職を解任し、当面は奉行職を空席のままにしておくという、御所様の命令があった。小川禅啓の政所職も同様に解任するとお命じになった。

綾小路信俊前参議がまた来た。綾小路によると、新御所様の琵琶の秘曲伝授が遅れているのはもったいないことだと今出川公行左大臣が申されているそうだ。

称光天皇の粗暴

十九日、晴。医師の同阿が来た。御所様のお脈が回復していると申した。喜ばしいことだ。冷泉正永が来た。田向長資朝臣が朝廷の小番を勤めた。初めての勤務だ。この小番については、室町殿である足利義持殿からしっかりと勤めるようにとの申し渡しがあつた。その理由は、称光天皇陛下は武勇をお好みで、太刀・刀・弓矢などをもてあそばされる。陛下のご機嫌を損ねると、近臣や官女、身分の低い召使いの者に対してまでも、金属製の鞭でお叩きになる。また天皇でありながら、自ら弓をお引きになる。陛下のお行儀が良くないことは、人々の秘かな悪口の種になっているらしい。そのため、この件について室町殿から上皇様へご進言があつた。それでまた広橋兼宣大納言・日野有光中納言・裏松義資中納言を使者にして、上皇様から直接お諫めがあつたのだが、陛下はまったくお聞き入れにならない。そのような経緯から、朝廷の大番役・小番役の者たちに対して、「陛下をしっかりと守りなさい」（実質的にはしっかりと監視しなさい）と、室町殿からご命令がでたということなのである。このところ、このような陛下のご行状が京都で一番の噂話になっている。

さて田向経良三位が御所様からお叱りを受けたことを歎いている。綾小路信俊前参議や寿蔵主が仲裁に入つて、大光明寺長老に取り成した。「いずれにせよ、今後はきちんと昔からの決まりを守つて、禁を破つた者を厳しく処罰するのであれば、今回のことをお許しになつてもかまいません」と長老が申された。それで今回はお許しになるといふことで、収まった。めでたいことである。

二十日、曇。田向長資朝臣が帰つてきた。朝廷の小番で一緒に宿直したのは、四条隆直中納言・嗣高朝臣・高辻長広朝臣だったという。

伝え聞くところによると、今日、相国寺の人供（※）行者やその召使いたち五十人が侍所の一色に逮捕されたそうだ。この僧たちは魚を食べるなど不義の行いがいろいろあったので、それを取り調べるための逮捕だそうだ。人供行者の召使いたちを拷問したところ、自白があつて、さらに僧四〜五人が逮捕された。このことで、相国寺は大混乱となつて、どうしようもない状態らしい。

※人供：未詳。

琵琶「仙家」

二十一日、雨が降り、雷が鳴った。綾小路前参議が帰った。重日（※）なので、雅楽の練習をした。平調の曲七つ。

ところで、私は琵琶の名器を持っていないので、一つ遣ろうと前々から御所様がお約束になつていた。それで今日、下さった。「仙家」という名のある琵琶だ。後小松上皇様より八朔のお返しにいただいた琵琶だそうだ。これまで弾いていた琵琶は「白玉」という名の琵琶である。今出川家に住んでいた時から長年弾き慣れた楽器である。今出川左大臣から秘曲を伝授された時、本枕（※）としてもらつたものである。その後ずっと、この白玉を弾いているが、音量が物足りない。仙家も同じような琵琶なのだが、少しは音量が出るようだ。それで、この琵琶をいただいたのである。

さて政所の小川禅啓をお許しになることについて、大光明寺長老が衣鉢侍者をよこして、「もうそろそろお許しになつてもよろしいのではないですか」とお取り成し下さった。このような申し出があつたからには、もう問題はなからうということ、すぐに禅啓をお許しになつた。禅啓は参上してきて、御所様にお礼を申し上げ

た。

※重日：この日は、巳の日。

※本枕：未詳。応永二十三年七月二十四日条にみえる法枕と関連するか。

二十三日、曇。大光明寺長老が来た。この間のことでお礼を申し来た。しかし、御所様はお会いにはならなかった。相国寺のことで、室町殿は、人供行者らをすべてお許しになり、寺へ帰した。しかし、白状によつて逮捕した四〜五人の僧は罪が重いので、遠流の罪になさつたそうだ。それまでに逮捕した二十八人の僧は、流罪を免れたようだ。まずは状況が落ち着いて喜ばしいと、大光明寺長老がお話しになつていた。

名笛「柯亭」

二十四日、晴。綾小路前参議が来た。長橋局（勾当内侍）に頼んでいた事があり、今日はそのお返事を伝えるために来たのだ。御所様は年老いて病気がちなので、領地の相続承認を、この春から冷泉永基を通して後小松上皇様へ申し入れなさつていた。しかし、まだ上皇様からのご返事がない。

それで御所様はいろいろとお考えになつた。「柯亭」という、天下の名物で大変な重宝の笛がある。これは崇光天皇から受け継いで、永年大切にしてきたものである。これを後小松上皇様に差し上げて、領地の相続承認をお願いしようと、御所様は宮家の者たちに諮問された。皆の意見はまちまちだった。しかし、「このような重宝を差し上げれば、ご相続が承認されるのは間違いないでしょう」という意見が多かつたので、そうすることに決まつた。

それに関して今出川左大臣を御所様の使者として上皇御所へ御笛を持参なさるのがよかろうと綾小路前参議とご相談なさったところ、それは難しいと御所様が反対なさった。それで使者役を勾当内侍にお頼みしたところ、問題ありませんと了解の返事があった。上皇様へご書状をお送りになって、詳しいことは勾当内侍から直接お伝えするようにとお命じになった。

琵琶の道が絶えてしまうのは残念なので、秘曲を新御所様と私へ伝え置くつもりだということも、上皇様へのご書状にお書きになったとのことである。そのような才能のない私のことが上皇様のお耳に入るとは喜ばしいやら恐れ多いやら。いよいよ練習に励もうと思うのだが、もともと才能がないので残念なことである。

永年大事に保管していた名器を他人のものにしてしまうのは、残念であり、また子孫への影響も少なくない。いずれにせよ、悲しみの涙に暮れた。とても名残惜しさに、綾小路前参議に吹かせた。五常楽急・太平楽急などを吹いた。御所様もお聞きになり、皆、涙を流した。妙音天の思し召しにより再会できることを心中、祈念するばかりである。綾小路前参議に御笛とご書状を持たせて、退出させた。「明日、長橋局のところに行きます」と綾小路前参議が申した。

二十五日、晴。今日から三日間、私は特別の祈願を行うつもりだ。長谷寺と清水寺に礼拝祈念して、この領地相続の承認がうまく行きますようにと願いを立てた。

後小松上皇の反応

二十六日、晴。暑さは蒸し風呂のようだ。納涼のため、御所様の船に

いろいろと肴を積んで、酒宴を開いた。対御方と庭田重有朝臣がその準備をした。今後、順番で船遊びの幹事役を回すようにとお定めになった。今回は、いつものメンバーと寿蔵主が参加した。

さて昨日、勾当内侍が名笛「柯亭」を上皇様へお目につけたそうだ。詳しい話も直接お伝えしたという。「この笛のことはずっと以前から聞き及んでいた。いつかは見てみたいと思っていたところ、こうして献上されたのはとてもうれしい。どこの誰にも譲り渡さず、こうして私に献上していただいたことはまさに望み通りである」と仰ったそうだ。上皇様のご機嫌がよかったので、すぐに領地相続承認のことや私らに秘曲を伝授することなども詳しくお話ししたところ、いろいろと丁寧なお返事があったそうだ。近日、上皇様から正式のお返事があるでしょうと勾当内侍から綾小路前参議へ書状が届いたという。そして綾小路前参議から以上のような内容を知らせる書状が来たそうで、まずはめでたいことである。長谷寺と清水寺に祈念している最中にこのような吉報が来たのは、いずれにせよ仏の思し召しである。頼もしいことだ。

さて新御所様への琵琶秘曲伝授は、今出川左大臣・綾小路前参議らが準備して、実施されることが決まった。日時を陰陽師の安倍守経朝臣へ内々にお尋ねなさっていたところ、七月二十四日が吉日だと申した。賀茂在弘朝臣が伏見宮家専属の陰陽師だが、御所様へ秘曲が伝授された時、安倍守経が日時を占った。この先例に基づいて、御所様が今出川家を通して安倍守経に占わせただのである。安倍守経は今出川家専属の陰陽師なので、直接には今出川左大臣が守経に占うよう命じていた。その占いの結果が今日、届いたのである。

二十七日、晴。三日間の祈願も今日で終わり。祈願の途中で吉報が来た。上皇様の覚えめでたいのは、願いが叶ったわけであり、大変喜ばしい。先日約束した船の納涼、今日は田向経良三位が幹事として準備した。水面は涼しく、大甕の酒はいい趣向である。いつものメンバーに加え、たまたま来た栄侍者も参加した。またその後、御所殿上の間で高級ではない抹茶を順番で用意して飲む茶会があった。

二十八日、晴。納涼会の幹事役を私にした。寿蔵主が私の手足となつて、いろいろと準備してくれた。大光明寺の客僧で、物語りの上手な人がいるそうだ。長老からの推薦があったので、御所様がお呼びになった。酒宴の肴として物語りをしてもらった。その弁舌は玉を吐くようであり、言葉は花を散らすようにすばらしかった。聴衆は心から感動した。ちょうど私が幹事役の時に、この僧の物語りで皆が盛り上がったのは、ちょっと鼻が高い。医師の同阿も来て、その物語りを聞いた。彼も僧の話に感心していたが、すぐに帰っていった。

室町女院領のリスト

三十日、晴。綾小路前参議が来た。上皇様のお返事を持ってきた。名笛のことを詳しくお話したら、上皇様はとてもお喜びになったという。それで領地の相続承認のことは問題ないでしょうとのことだった。さらに、室町女院暉子（きし）内親王から相続した領地のリストも出して下さいとのことだった。そのリストも相続承認の書類にお載せ下さることだった。上皇様のご機嫌がうるわしいのは、すべて神様仏様の思し召しであり、めでたいことだ。さらに、私らへの琵琶の秘曲伝授についても、同じようにその書類に載せて

くださるそうだ。とても名譽なことだ。室町女院から相続した領地のリストを整理なさるといふ。勝阿は文才があるので、このリスト作成のためにお呼び出しになったのである。

今夜は六月祓（※）である。風呂に入った。綾小路前参議が伏見宮家に泊まり込んだ。六月祓で用いる茅の輪を作る役を勤めるためである。

※六月祓（みなづきはらえ）：陰暦六月晦日に茅の輪形をくぐったり、茅の幣で身を浄めたりする、お祓い。

上皇御所の火災

七月一日、晴。「立秋孟律（※）、めでたい兆しで、とてもとても幸せだ」と予祝した。勝阿が来た。室町女院の領地リストなどについて御所様が勝阿と相談なさった。現在、伏見宮家が実効支配している領地のリストなどを取り揃えて、明日、上皇御所へ進上なさる予定だそうだ。

さて夕方、人々が伝えてくると、昼頃に上皇御所が焼け落ちたそうだ。この御所は、もともと東洞院の日野資教一位禪門の私宅であった。それを御退位以後に召し上げて、上皇御所になされたのである。火災が事実かどうか疑問に思っていたが、他の人たちもだいたい同じ話を伝えてきているので、どうも本当のことらしい。とても驚き歎いた。綾小路信俊前参議と田向経良三位が夜になって京都に出かけ、上皇御所へ急いだ。その一方で、御所様から別途、お見舞いの使者を上皇御所へ派遣した。

明け方に田向三位が戻ってきた。上皇様は醍醐寺三宝院にいらっしやるそうだ。冷泉水宣を通してお見舞いを申し上げたところ、「早

速お見舞いの使者を派遣してください、うれしく思っています。とても驚きましたが、仕方のないことです。以上のような状況です。で、「ご了解ください」とのことだった。

田向三位が言うことには、昨日午後三時に正親町烏丸の交差点あたりから火が出たらしい。出火場所は、浄花院の隣りだそう。ただこの浄花院は類焼を免れて無事だった。その次に裏辻実秀参議兼近衛中将の屋敷、その次に万里小路豊房前中納言の屋敷、そして万里小路時房頭弁の屋敷と燃え広がりに、それに続いて上皇御所が焼けたという。この他にも、烏丸の薬師堂・土蔵・民家など十二町に及んで類焼したそう。

朝廷の防火

朝廷の四足門にも火が付いたが、打ち消したそう。紫宸殿も類焼しそうになったが、室町殿ご兄弟の足利義持殿・同義嗣殿が駆けつけて、称光天皇陛下に他所へ避難なさるよう進言なさった。ところが、「わしは輿などに乗って出て行くつもりはない」と仰って陛下は御刀を帯び金属製の鞭を持って紫宸殿にお留まりになった。そこで室町殿は諸大名に動員を命じた。動員された数百人は御殿の屋根に登り、太刀や刀で火が付いた所を切り落として、防火した。それで、内裏は無事だった。もしすぐに陛下がお逃げなさっていたら、内裏が焼けたのもちろんのである。陛下に勇気があったので、皆が励まされて火を消したのである。すべては陛下の名誉ある勇氣の賜物である。

上皇様の御道具や調度品などはほとんど御所から運び出された。献上したあの名笛も無事だったそう。とても喜ばしい。万里小路

家や裏辻家らは、重要な書き物や調度品など一つ残らず焼き失ったそう。これはすべて天魔のなせる技であることは勿論である。

後に聞いたところによると、貴人のボディガードである下毛野武遠の家から火が出たそう。武遠が留守にしていた間に、下毛野武の下男が失火したらしい。それで、その下男はすぐに姿をくらませたそう。領地リストなどを明日上皇様に進上する予定だったが、ちょうどこの火災とかちあつてしまい、とても不運な事だ。

※孟律：未詳。孟にも律にも「はじめ」の意があり、七月が孟秋すなわち「秋のはじめ」であることと関係あるか。

明徳の乱の物語

三日、晴。寿蔵主が、納涼会の幹事であった。御所様が先日の物語りをする僧をまたお呼びになって、語らせた。その僧は山名氏清陸奥守謀反の話（明徳の乱）を少し語った。面白かった。

大光明寺の僧二人が使者としてやって来て、「山田宮の境内の木を伐ることはよろしくないのです、同社の社人に厳しく制止なさってください」と申し入れてきた。山田宮の木を神事として伐ることは、以前からなされてきたことである。ところが山田宮は大光明寺の敷地の中にあると大光明寺は主張している。しかし、山田宮の境内は同社の社家の土地である。それを示す文書の証拠もある。そのことを御所様が使いの僧に仰った。

宇治川の白蛇

さて、最近、宇治川の蒲の密生地に白い蛇が出るといふ。指月庵前の宇治川蒲原で子供たちが白蛇を見たという。身分の低い者たちの言うことだから信用できないことである。

四日、晴。大光明寺より継首座が使者として来て、山田宮のことに關する大光明寺の文書を御所様にお目につけた。山田宮の社人らの言いつ分を田向経良三位を通して、継首座にお伝えになった。山田宮の社家の主張の方が理にかなっているとご判断なさったらしい。

上皇御所の再建と仮御所

五日、晴。庭田重有朝臣が京に出かけた。帰ってきて言うことには、上皇御所のことは、室町殿から広橋兼宣大納言を通して上皇様へ申し入れなさったそうだ。「仮御所にふさわしい建物がありません。ただ勤修寺経興の小河亭が先例にもかなった場所だと存じます。後円融上皇様もこの亭に滞在なさったことがございます。ここにお移りになってはいかがでしょうか」と申された。上皇様のお答えでは「小河亭は、思うところがあつて、よろしくない。しばらくは醍醐寺三宝院に滞在する」とのことであつた。上皇様の内々のお気持ちとしては、室町殿がすぐに御所の再建を準備しないことにお腹立ちらしい。このことを広橋が室町殿へお伝えしたところ、「御所の新築は静々と進めております。問題は、それが完成するまでの間の、上皇様の御在所のことなのです。三宝院は不断護摩の勤行をする寺院なので、魚食など不浄のことをすると問題となります。どうかしばらくの間、小河亭にご滞在下さいませんか」と室町殿から重ねてお申し出があつた。それで、上皇様は「新築ができるまでの間ならば、小河亭に移つてもよろしい」と仰つた。それで小河亭の壊れている箇所を急いで修理させたそうだ。

新築工事の開始時期について、陰陽師の土御門泰家朝臣がこの十三日が吉日ですと占つてきたという。室町殿は、諸大名に対して

それぞれの領国に段銭を臨時課税するよう、お命じになった。ただ段銭を満額徴収するのでは時間がかかつて遅れるだろうから、守護一國あたり銭百貫文ずつ納めなさいとお命じになった。御所の門と築地塀は、管領細川満元殿が担当する。土地の地ならしは、諸大名と侍所司の一色義貫殿にお命じになったそうだ。御所は四百メートル四方の規模になる。そのために、万里小路豊房前中納言・万里小路時房頭弁らの屋敷地を接収なさつた。年内に竣工するよう急ぎなさいと室町殿は命令されたそうだ。

六日、晴。後小松上皇様へ「火事になって、とても驚きました」と火事見舞いのお手紙を御所様が直筆でお書きになった。そしてまた伏見宮家の領地相続承認の件について、こういう状況なのでしばらくは遠慮して、後で上皇様に命令書の発給をお願いしますと、勾当内侍を通して申し入れなさつた。

七夕法要

七日、曇で、朝、雨が降つた。七夕の法要のため、皆に草花を集めるようお命じになった。それで、朝早くから献上してきた。座敷を少し飾つた。屏風を立て直し、本尊の唐絵を屏風に掛けた。その前に違い棚を一つ立て、そこにいろいろな中国製の品物を置いた。花瓶やお盆なども数十個置いた。詳しいことは別紙に記した。

花を献上した人々は、以下の通りである。新御所様・私・綾小路三位（田向経良）・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・大光明寺の僧たち・指月庵主・蔵光庵主・行藏庵主・退藏庵主・浄隠庵主・即成院主・光台寺住職・玄忠・小川禅啓・小川有禅・宝泉・北蔵らである。花瓶が二十六瓶できた。飾り物や中国製の美術品などを宝泉がすべて

進上した。僧や俗人も見学に来た。

七夕の節供をいつものようにお祝いした。その後、風呂に入った。納涼会の幹事を近衛局が勤めた。そこでまた例の物語をする僧をお呼びになって、いろいろと面白い話をさせた。それに先だつて音楽を演奏した。盤渉調の曲を特に三曲演奏し、朗詠などもあった。私は少し体調不良だったので、演奏に参加しなかった。残念なことであつた。

空から降り下る蛇と龍

八日、朝に大雨が降つた。後で聞いたところによると、大雨のさなか、相国寺の鎮守八幡宮の社前あたりに、天から小さな蛇が一匹降つてきたそうだ。子供がそれを打ち殺してしまった。近江国にもこの日、龍が舞い降りてきたそうだ。希にみる不思議なことだ。

九日、晴。上皇様からの先日のお返事が届いた。あの名笛は無事であつたので、上皇様はともにお喜びだそうだ。めでたいことである。

十日、晴。大光明寺の長老が来た。山田宮の木を切ることに関して、文書などを持ってきた。長老ははまだ納得してしないと申された。とても無理な話だ。まずは結論を先送りすることになった。

十二日、晴、昼にわか雨が降つた。今出川公富参議兼近衛中将が燈呂一つ贈ってきた。毎年のお志である。椎野寺主が欲しいと申されたので、差し上げた。高辻直広朝臣が宮家の門前までやって来て、ある村の領有について訴えてきた。庭田重有朝臣を通して、いろいろと申した。筋が通つていてかわいそうなので、別の領地を替え地として与えると、御所様がお宥めになった。会つてやろうと仰つたが、急用があると言つて、門内には入らず出ていった。

十三日、晴。仙洞御所の新築工事開始の日である。建築の責任者は、富樫満成兵部大輔だ。仙洞御所の焼け跡を管領や侍所などの者たち数百人が掃除したそうだ。医師の同阿が来た。

十五日、晴、盂蘭盆会をいつものように行つた。蓮の飯でいつものようにお祝いした。大光明寺で行う施餓鬼供養を御所様が見に行つた。新御所様と私は行かなかつた。夜に石井村と船津村の念仏のパレードがやって来たので、秘かに見物した。

桂地蔵のうわさ

十六日、晴。伝え聞くところによると、山城国桂里にある辻堂の石地藏で、去る四日、とても珍しく不思議なことがあつたという。その詳細は、次の通りだ。阿波国に身分の賤しい男がいた。ある時、小柄な法師が一人来て、「私が住んでいる草庵は壊れて、雨露にも耐えられません。それで建て替へようと思つています。あなたが来て建てて下さい。頼みます」と言つた。男は「私は貧しくて、食べていくことさえもままなりません。ましてや妻や子を捨てて、他所へ出かけることなど、できるわけがありません」と断つた。小柄な法師は重ねて、「そのことはお助けしましょう。ただ来て下さい」と言つた。それですぐに男はその法師と出かけた。阿波国から山城国へ行くのに三日はかかる。ところが、ほんのわずかな時間で、山城国へ到着した。

壊れた辻堂には石地藏が安置してあつた。辻堂を建て直そうとする人もいない。小柄な法師も姿を消してしまつた。近くにいた人へ「ここはどこかと男が尋ねると、山城国桂里だと答えた。それでこの男は、「さてはこのお地藏様がここまで俺を連れてきて下さつたの

だな」とありがたく思った。しかし、桂里には知り合いもないし、このままではどうしようもない。そう思つてとりあえず京へ上ろうとしていたところ、さきほどの小さな法師が現れて、「どこへも行ってはいけません。ただここに住んでいて下さい」と言つて、また姿を消した。それでしかたなく辻堂に佇んでいた。

一方、西岡に住んでいる竹商人の男がいて、日頃、この辻堂が壊れていることに心を痛めていた。その竹商人がこの辻堂に来て休んでいると、あの阿波国の男と出会い、二人で雑談をした。阿波国の男が、今回のことを最初から話して、地蔵の優れた法力は不思議であると語つた。そして「辻堂の再建を一緒に手伝ってください」と言つたら、西岡の男は、筋違いの事を言う傲慢な奴だと散々に悪口を言い合つた。そのいさかいが白熱して、とうとう西岡の男は刀を抜いて阿波の男を突き刺そうとした。それで阿波の男は逃げ出した。さらに西岡の男は頭に血が上つて、その石地蔵を切りつけた。そうしたら、男の腰が抜けて気が狂つてしまった。

近所の者たちが集まり、この騒動を見ていて、お地蔵様の罰はやはりきめんだと言つて、皆で石地蔵を拜んだ。さて気が違つた男はしばらくすると正気に戻り、お地蔵様にお詫びした。そして「この御堂を建て直してお地蔵様にお仕えます」とお祈りしたところ、すぐに腰も立ち、頭もスッキリした。それで出家しようとしたら、夢に地蔵が出てきて、「法師になつてはいけません」と仰るので、男は白い狩衣姿で、地蔵に奉仕した。地蔵を突き刺した腰刀は散々にゆがんでいた。その腰刀を御堂に懸けて、参詣者に拜ませた。一方、阿波の男は法師になるように地蔵が命じていたので出家して、西岡

の男と二人で御堂再建の準備をした。やがてこの事件が世に知れ渡り、大勢の者たちが参拝に来たので、銭などいろいろなお供え物が山のように貯まり、御堂の再建はすぐに竣工した。

この石地蔵への願ひ事はすぐに叶つた。特に病氣の者にてきめんで、盲目の者がお祈りするとすぐに目が見えるようになった。その靈驗あらたかなことは全国に知れ渡り、参詣者は何千万人ともなつた。人々はこの地蔵堂へいろいろと風流な拍物でパレードしながら、お参りした。このところ、京都でも地方でも、この桂里の石地蔵のうわさでもちきりだ。伝え聞いた話で信用しがたいが、いろいろな人から耳に入ったので、記しておく。それにしても、道理に合わない話である。

十七日、晴。今夜、上皇様は小河亭へお引越しなされた。お供の殿上人は六人、六位の北面の武士が十人だという。室町殿が同席されて、上皇御所が竣工するまでの、しばらくの間、ここにお住みになるそうだ。

さて今出川家より書状が来た。今出川公行左大臣の母・南向殿が、この十二日、夫の故今出川公直左大臣入道の西谷墓所へ焼香に行つたそうだ。そして、その帰りに下痢になつたという。昨日より病状がとても悪化している。老齢なので、長くは持つまいとのことである。とても驚き悲しんだ。

十八日、晴。今出川家に使者をつかわした。南向殿の病状を見舞わたのだが、切迫した状況だという。夕方には一時危篤状態になつたが、水を飲ませたところ、また息を吹き返したという。医師の丹波頼直朝臣によると、今日明日の命なので、貞成様とは会わせない方

がよいでしょうと申したという(※)。とてもかわいそうだ。もう一度も会えないというのはとても残念だ。

さて、新御所様の琵琶秘曲伝授の儀式は、二十四日に決定した。それで儀式までの七日間、音楽会をすることになり、今日から始まった。代々の本尊である妙音天像を懸けて、雅楽を奉納するという。平調の曲五つを特に演奏した。琵琶法師の妙一勾当が来て、平家物語を語った。

※丹波頼直は、貞成が触穢になることを危惧したのであろう。

十九日、晴。高倉通光三位入道が来た。綾小路信俊前参議も来た。新御所様の秘曲伝授の儀式を準備するためだという。音楽会があった。綾小路や田向三位らも参加した。妙一がまた来て、平家物語を語った。綾小路が酒宴を準備した。

今出川家南向の死

二十日、晴。崇光天皇の皇女で尼の入江殿今御所様がいらっしゃった。御所様にお願ひがあるという。今御所の母上である真修院様がお病氣であり、また高齢のため回復の見込みがない。ところが、崇光天皇から真修院様が拝領した領地は、ご自身一代限りの領地なのである。「私の死後も、この領地を伏見宮家に没収しないで下さいませんか。娘の入江殿今御所へ譲りたいのです」と真修院様が仰つていられるという。「このことは難しい問題なので、すぐにはお答えできません、後でお返事いたしましょう」と御所様が仰つた。それで、今御所様はすぐにお帰りになった。

さて今出川家へ南向殿のことを問い合わせたら、今日の午前十一時に亡くなったそうだ。今日明日とは思ってはいたが、実際に訃報

に接すると、とても戸惑ったし、大変悲しい。南向殿は、幼い頃から三十年あまり、私を養育してくれた人である。京・伏見とそれぞれ別居するようになってからも、今に至るまで密接に連絡を取り合っていた。私にとつては、他の人とは異なり、特別な方なのである。それなのに、その永年のご恩に何も報いることができなかった。特に私が成人式を経てからは、全くお会いできなかった。いずれにせよ、深く悲しんでいる。

今夜の音楽会では、双調の曲を七つ、そして黄鐘調の曲を三つ演奏した。綾小路前参議や田向長資朝臣も参加した。そして私も、少しだけだったが、合奏に参加した。南向殿のことがあるので、鳴り物を控えるべきであらう。しかし、霊前に音楽を奉納するということもあるし、自分にとつても音楽を極めたいという気持ちがある。すべてを音楽の神である妙音天の加護に任せることとして、特に今日の合奏に加わった。亡き人を悼まなければならぬ時に、音楽を奏でるとは無慈悲・無神経な者のように思われるかもしれない。しかし、無力な私としては、こうするより仕方がなかったのである。

南禅寺阿栄蔵主の来訪

二十一日、晴。音楽会があった。太食調の曲を五つ弾いた。御所様は鞆鼓を演奏なさった。綾小路信俊前参議・田向経良三位・田向長資朝臣が参加した。音楽会が終わって、お風呂に入った。私は今日から身を浄めて、故南向殿のために御経を読むことにした。南禅寺の阿栄蔵主がいらっしゃった。この方は、崇光天皇の皇子である。長い間、伏見にはお出でにならなかった。珍しいご来訪である。

園基秀の弟子入り

二十二日、雨が降った。園基秀参議が来た。以前、園の琵琶が未熟なので、御所様のお弟子になるよう、後小松上皇様のお取り成しがあつた。さらに秘曲などを伝授してほしいと、勾当内侍を通して上皇様よりお話があつた。そのようなお話が上皇様から出る前に、園参議へ琵琶の練習をしに伏見宮家へ来るように御所様が仰つたので、園は恐れ多いことですと申した。それで今日、御所様がお会いになつた。園の琵琶の演奏をお聞きになつた。平調の曲三つ、次に別の調子に移した青海波を弾いた。催馬楽はまだ習っていないというので、呂音と律音の二つの催馬楽をお教えになつた。

その後、音楽会があつた。盤渉調の採桑老・蘇合三帖・蘇合破急・万秋楽・白柱を弾いた。次に朗詠を綾小路前参議が歌い、私が合唱した。田向長資朝臣は合唱しなかつた。その後、輪台・青海波・千秋楽を演奏した。御所様は大鼓を演奏し、朗詠の時には伴奏で琵琶をお弾きになつた。新御所様・私・園参議は琵琶、綾小路前参議は笛。笙は長資朝臣らが担当した。田向経良三位はお腹の調子が悪いということ、来なかつた。私の琵琶の演奏を園参議がずっと聴いていた。心中恥ずかしかつたが、お互いに未熟なので、似たようなものだろう。

庭田重有朝臣は、伏見宮家の使者として、悲しみに暮れている今出川左大臣宅へ弔問に出かけていた。

綾小路たちの桂地藏参詣

二十三日、曇で雨が時々降つた。綾小路前参議・田向三位・長資朝臣・寿藏主たちが早朝、桂地藏へ参詣に行った。帰ってきて言うことは、うわさで聞いていたように、地藏様のお顔には傷が見えました。

この傷は次第に癒えて、小さくなつていくと。とても珍しく不思議なことだ。

重有朝臣が戻ってきた。夕方、今出川家に着いたところ、留守だつた。東山の宝幢寺へ火葬に行つていて、左大臣・大納言・参議兼近衛中将・女中・家僕ら皆が出払つていたという。慈雲院の尼たち、相国寺の僧たち、その他の尼や僧らが、大勢、御経をあげに行つたさうである。深夜の帰宅時分を見計らつて再度今出川家へ出かけて、話を聞いてきたさうだ。左大臣とはお会いしなかつた。その後、今出川家の家司である興衡朝臣や重徳らと会つて、詳しく話を聞いた。南向殿は、病氣になつて亡くなるまで、「貞成様と今一度お会いできなかつたことが残念です」と話していたさうだ。永年、お互いに親しんできた心中が察せられて、悲しみが深まるばかりである。亡くなる直前に、尼になつたという。生前はいつも、念仏を唱える人であつた。

今夜の音楽会は一越調の曲を七つと朗詠などであつた。音楽会に来なさいと豊原郷秋にお命じになつていたが、病氣だといつて来なかつた。領地を一ヶ村いただいた時は、一生懸命お仕えますと言つていたくせに、御所様のお呼びに応じないとは、けしからん奴だ。

新御所様の琵琶秘曲伝授

二十四日、曇つたり晴れたり落ち着かない、時々雨も降つた。夕方には晴れた。地藏講があつた。善基房がいつものようにお勤めした。雅楽の演奏はなかつた。地藏講が終わつてから、御所様の御前で皆、軽い食事をつた。この地藏講のメンバーは九人で、順番に幹事を勤めることになつてゐる。今日は私が幹事だつた。冷泉正永が来た。

さて今夜、新御所様の琵琶秘曲伝授の儀式であったが、全く内々の事として、簡略な形で行われた。進行役は麻の狩衣を着た田向長資朝臣、道具などを運ぶ役も同じく狩衣の庭田重有朝臣である。綾小路信俊前参議は衣冠を着て出席した。特に役をするわけでもないのに、控え役として衣冠を着てきた綾小路は立派である。

早朝に道場をしつらえた。客殿の南面二間に御簾を懸けて、巻き上げておいた。西面二間にも御簾を懸けて、巻き上げておいた。南面の大きな床の間、その東西左右の柱の際に高灯台を二本立てた。高灯台の上には柄の付いた灯台が置いてある。北の奥の間には、障子に沿って屏風二枚一組を立てた。その屏風に、西園寺家に伝わる妙音天の絵像をお懸けした。絵像の前に机一脚を立てて、お供えとお香、お花を供えた。その左右にも柄の付いた灯台を置いた。

東沿いの長押の中央に添って大文量(※)一帖を南北方向に敷いた。その畳の上に毛織物一枚と草座(※)を敷いた。本来であれば、龍鬢(※)を用いるべきであるが、略式にして毛織物を敷いた。御所様は出家されているので、僧が用いる草座を敷いたのは、先例通りである。この草座を師範の座席とした。西の長押沿い、南寄りに小文量を南北方向に敷いた。その上に東京茵(※)一帖を敷いて、伝授を受ける者の座席とした。本尊の前に毛織物一枚を敷いて、本尊を拝礼する席とした。そもそも本尊拝礼の儀式の座席はそれぞれ別個に敷くべきである。そして師範と伝授を受ける者が同時に拝礼するべきなのである。しかし、座敷が狭いので、師範が拝礼なさった後に、その席に伝授を受ける者が移って、拝礼するようにした。これは本式ではなく、臨時のやり方である。

まず、夕方に管弦の演奏があった。高麗楽の退走徳・崑崙破・崑崙急・納曾利・新鞆鞆・長保楽破・長保楽急。そして朗詠の徳是を私が歌った。笛は綾小路前参議、琵琶は新御所様と私、大鼓は田向三位、三鼓は御所様、鉦鼓は長資朝臣がそれぞれ演奏した。

開始時間が近づくと、御所様が裳付きの衣に香色(※)の袈裟を着けなさった。それまでは、冷泉正永がこの御装束をたたんで持っていた。伝授を受ける新御所様は、狩衣と薄紫色に鳥襷(とりだすき)の紋を付けた指貫(さしぬき)の袴をお召しになった。本来は直衣(のうし)であるべきだが、これも略装である。ただし師範の御所様が伝授を受けられた時も狩衣だったそう。もはや先例と言えよう。

開始の時刻になって、重有朝臣が師範の「虎」という名のある琵琶を置いた。次に長資朝臣が伝授を受ける新御所様の「卯の花」という名のある琵琶を置いた。その後、師範の御所様がお出ましになった。次いで進行役の長資朝臣が受者である新御所様を呼び出し、新御所様が席に着いた。そして長資朝臣が箱の蓋に入れた日時を占った文を持ってきた。師範がその文をご覧になり、次に伝授を受ける者がそれを開いて見た。この文は、数日前に陰陽師の安倍守経朝臣が占いの結果を報告したものである。

いよいよ御所様は長資朝臣を呼んで、御所中の人々を遠く退けるようにお命じになった。それで面々は皆、遠い場所へと退席した。ただ対御方お一人だけが近くに控えておられた。もしも何かご用事ができた時のためである。こうすることが先例なのである。私は近衛局の部屋に行った。今出川左大臣の秘曲伝授の折も、私はこの局

に行つたという先例に拠つたのだ。綾小路前参議・田向三位・重有・長資ら朝臣や正永らも一緒だった。この少しの間、酒を飲んだ。

秘曲伝授の儀式が終わつた。御所様が伝授の証明書を書き新御所様へお与えになつた。次に長資朝臣が法枕（※）の琵琶を持ってきた。この琵琶は「仙家」という名で、私の楽器である。とりあえず、お貸ししたのである。秘曲を受けた者がこの琵琶を受け取り、師範の御前に置いた。次に儀式の手伝い役の者がこの御琵琶を取り片付けた。次いで師範がご退席になつた（※）。最後に、秘曲を受けた者が退出した。

その後、祝宴があつた。皆、装束を替えず酒席に臨んだ。お祝いの三献の時、引き出物が御所様に献上された。引き出物は、青銅製の花瓶とお香の道具である香盤であつた。その後、さらに数献、酒宴が続いた。音楽や雑芸などが演じられた。深夜にお開きとなつた。内々の儀式であつたが、すべて無事に終了し、喜ばしい限りだ。

※大文畳（だいまんだたみ）：大きな文様の高麗錦の縁をもつ畳。

※草座（そうざ）：法会の際に導師が敷く座具。四方に糸を出して草の葉にかたどつた。

※龍鬢（りゅうびん）：天日に晒すなどして渋茶色になつた蘭草で織つた畳表。

※東京茵（とうぎょうしとね）：東京錦（とうぎょうぎ）の縁を付けた敷き物。

※香色（こういろ）：黄みがかった明るい灰黄赤色。

※法枕：未詳。応永二十三年六月二十一日条にみえる本枕と関連するか。

※「ご退席になつた」：原文では「入御」（お入りになつた）とあるが、「出御」の誤記であろう。

斯波義教一行の伏見荘来訪

二十五日、晴。勘解由小路右衛門督入道斯波義教、その子息で前管領の斯波義淳左衛門佐、それに家臣の甲斐祐徳や織田以下の数人が伏見荘へ来たそう。納涼のためらしい。土倉の宝泉房の屋敷に泊まつたそう。斯波らからお酒や引き出物などがいろいろと御所様へ届けられた。御所様からは返礼にいろいろとお与えになつたらしい。後日、御所様は勝阿を通して斯波へお礼の意をお伝えになつたそう。

二十六日、晴。綾小路前参議と冷泉正永が京都へ戻つた。戻る前に、新御所様がご自分のお部屋で、綾小路にお酒をお振る舞いになつた。秘曲伝授の儀式をつつがなく準備してくれたお礼である。今日は南向殿の初七日だ。身を淨めて御経を読んだ。また哀しみがこみあげてきた。

蛇の怪異（その二）

さて伝説などというものは、記録してもつまらないものだが、耳にした話を書き止めておこう。少し前のことだが、下京あたりで米を売る者がいた。その米屋に男が一人やつて来て「お米を買いましょう」と言つて、枡を置いた。「今度取りに来るまで、この枡を持ち上げてはいけません」と言い、枡を伏せて置いたまま、その男は出ていった。その後、いくら待っても男は戻つてこない。その翌日も男は来なかつた。あまりにも変だと思つたので、その枡を持ち上げてみたら、枡の下には小さな蛇がとぐろを巻いていた。不思議に思つ

で見えていたところ、この小蛇はたちまち大蛇になってしまった。この米屋には、十六七歳くらいの顔のかわいい娘がいた。大蛇はその娘にぐるぐる巻き付いて、家から出て行き、姿を消した。両親は驚き、大声をあげて泣き叫んだが、娘の行方はとうとう分からなくなつてしまったという。

蛇の怪異 (その二)

また別の話。下京に住んでいる男が宇治の今伊勢神社へお参りしたら、社頭あたりに白蛇がいた。この男が扇を開いて「もしあなたに宇賀神(※)ならば、この扇に乗って下さい」と言った。そうしたら、この蛇が扇の上には這い上つたので、喜んで布に包んで連れ帰つた。そして自分の家の北西の角に社を作つて、そこに蛇をお祭りした。そうしたら、思いがけず物が手に入ったり、他人も物を貸してくれたりして、生活が安定してきた。それでやはりこの蛇は宇賀神だと思ひ、お供えをして大切にしていた。そうしているうちに、この白蛇は次第に大きく成長していった。それで恐ろしくなつて、男はこの蛇をどこかに捨てようとした。それに対して、妻は「宇賀神であるならば、捨てるべきではありません」と反対したので、その通りだと思ひ直して、捨てるのをやめた。

その後、この男が他所に外出する度に、この妻は眠たくなつて昼寝をしていた。ある時、隣人が男の家を覗いて見たら、大きな蛇がこの女の上で、とぐるを巻いて、うずくまっていた。隣人がこの事を男に知らせたら、男は「俺もなぜかしらこの頃、気味悪く胸騒ぎがしていた。さては信じられないようなことが起こっているのかもしれない」と言った。それで男は外出する振りをして、隣の家から

自分の家を覗いて見ていたら、聞いたとおり、妻は昼寝をしはじめた。そこへ大蛇がやって来て妻の上へ這い上がるうとした。男はそれを見て、走り出し、太刀を抜いて蛇を切ろうとした。そうしたら蛇は男の妻をきつく巻き取つて、外へ出ていってしまい、どこかに行方をくらました。男はあちこち尋ね歩いたけれども、一向に行方は分からない。それから、男はまた、たちまち貧乏になつてしまった。これは本当に不思議なことだという話を聞いた。

蛇の怪異 (その三)

またこの五月のころ、河原院聖天(※)へ一人の女が参詣した。お籠もり七日目の最終日、本尊の歓喜天の前でお祈りをしていたが、急に立ち上がつて女は外へ出ていった。その後、しばらくしても姿が見えないので、心配した僧が外へ探してにでた。そうすると、女は藪に向かつて小便をしているようだった。しかし、身体をよじる様子なので不審に思つてしばらく見ていると、女はとても苦しみ始めた。それで周囲の人々に事態を知らせて、近づいてみると、大きな蛇が女の小便の穴に入っていた。僧たちが集まつて、女を仰向けにして、蛇の尾を引いてみたが、引き出せない。さらに四五人が力を合わせて引いたら、頭のえらの部分から蛇の身体がちぎれて、頭の方は女の腹の中に入ってしまった。それで女は死んだようになつてしまった。どこに住んでいる人が尋ねると、女は絶え絶えの息の下で、どここの者ですと言つた。そこで、その所へ人をつかわして事情を説明させた。興梟ぎ中間(※)の者など大勢がやって来て、女を連れて帰つた。その後すぐに女は死んだとうわさに聞いた。顔かたちがとても美しい女であつたが、いったい何を祈願した

のであろうか。歓喜天の罰があたったんじゃないかと推測する者もいた。

このような不思議な話をたくさん聞いた。

※宇賀神（うがじん）…福の神。

※河原院聖天（しようでん）…京都・祇陀林寺の歓喜天のことか。

※中間（ちゅうげん）…公家や武家に仕える、侍と小者の中間の位にある従者。

二十九日、雨が降った。新しい上皇御所の門柱が立ったそうだ。

（続）

『看聞日記』現代語訳（二）正誤表

『米沢史学』三〇号（二〇一四年）に掲載した『看聞日記』現代語訳（二）の誤りをここに訂正する。村井章介氏・松園斉氏の懇篤なご教示に感謝申し上げます。

○参考文献 参考文献欄に次の文献を追加する。

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

○一月二日条

（誤）綾小路信俊参議が音楽のことを請け負わされた。

（正）綾小路は楊梅親家に何度も音楽について教えを得ていた。

（誤）このように、楊梅と綾小路とは音楽上の師弟関係にあるので、

（正）このように、綾小路と楊梅とは音楽上の師弟関係にあるので、

○一月一日条

（誤）綾小路三位（田向経良カ※） （正）綾小路三位（田向経良）

（誤）※この年、…の注記

（正）※「綾小路三位」が田向経良である点については、参考文献欄の村井章介論文を参照のこと。

・末尾に「田向長資朝臣」を補う。

○一月二日条

（誤）経興朝臣 （正）経興

○一月五日条

（誤）まず山村が木守寺の人供行者の物真似など、

（正）まず木守寺の人供行者ら山村の人々が

○二月一日条

（誤）お茶菓子三種など （正）三種類の軽食とお茶うけなど

○二月二日条

（誤）「気霽風流新柳髪」

（正）「気霽風梳新柳髪」（気霽レ風ハ新柳ノ髪ヲ梳ル）

○二月二八日条

（誤）三木善理が土地を売ったのはしかたないが

（正）三木善理が土地の支配権に基づいて売ったこと自体は問題ないが

○二月二九日条

（誤）まず参音声（※）があった。そして賀王恩・安摩・二舞

（正）まず参音声（※）の賀王恩・安摩・二舞を演奏した。

（誤）左右…退出音声（※）の長慶子。

(正) その後左・右交互に、万歳楽・地久、採桑老・新鞆鞆、春庭花・長保(弦楽器と管楽器で残楽※)、秦皇・皇仁、打毬楽・垣破、河南浦・胡德楽、太平楽(弦と管で残楽)・狛杵、北庭楽(弦と管で残楽)・林家(同じく弦と管で残楽)、抜頭・八仙、陵王・納曾利(弦と管で残楽)を演奏した。そして退出音声(※)は長慶子。

○三月一日条

(誤) 屏風絵三幅を立て、…掛け軸を懸けた。

(正) 屏風を立て、これに本尊が観音で両脇侍が猿の絵像三幅を掛けた。

○三月四日条

(誤) 相殿こと庭田貴子さん (正) 相殿こと庭田資子さん

○三月七日条

(誤) それなのに、欠席したのは無礼である。

(正) しかし、長広が出席すると返事をしていながら来なかったのは、無礼である。

(誤) ノコギリ (正) 鉦(ちやうな)

(誤) 藤花の盃を御所様がお取りになって、皆、

(正) 御所様が藤花の盃でお酒を飲まれたので、皆も

○三月一日条

(誤) しかたなく経良抜きで、綾小路信俊参議と共に雅楽を演奏することになった。太鼓を借り受けに田向の家へ出かけた。

(正) 太鼓を借り出して、田向の家へ出かけた。綾小路信俊前参議も一緒に行き、田向の家で音楽会をしようということになった。

○三月二四日条

(誤) 以前も上皇御所へ参った際、貞成様にあらかじめ見ていただく

たおかげで、うまく行った。今回もお目にかけますので、まずご検討くださいとのことだった。

(正) 以前も上皇様の事前チェックを受けて、何とかお眼鏡にかないました。今回も上皇様の事前チェックがありますので、まずは貞成様に見ていただきたく存じますということだった。

○三月二六日条

(誤) 近衛家に仕えている久増

(正) 近衛府生の秦久増

以上